

近世庶民のリテラシー

小咄から見る江戸の文字環境

大石 学

東京学芸大学名誉教授

江戸の教育力

本稿は、江戸の「平和」と「文明化」を支えた庶民のリテラシー（読み書き能力）について、江戸小咄を中心に検討するものである。

幕末期に日本を訪れた二人の外国人は次のような文章を記している。

一人は、一八六四（元治元）年来日の仏国駐日公使レオン・ロツシュである。彼は、江戸幕府一四代將軍徳川家茂に上書を提出した。旧幕臣で親仏派の栗本鍼雲の遺稿集『匏庵遺稿一』によると、ロツシュは、「二百五十年の間、国内泰平にして目に干戈かんかを見ざるの洪福こうふくを保てるは、世界に聞たる例なき所なり」【註一】と、江戸時代二五〇年以上の『平和』を世界に類のないことと高く評価している。

もう一人は、一八六五（慶応元）年世界周遊の途上来日した、トロイ遺跡の発見で知られるドイツ人ハインリッヒ・シュリーマンである。彼は、「この国は『平和』で、総じて満足しており、豊かさに溢れ、極めて堅固な社会秩序があり、世界のいかなる国々よりも進んだ文明国である」と、江戸

の「平和」と「文明」を評価し、「もし人が言うように文明を物質文明として理解するならば、日本人は非常に文明化された民族だといえよう。なぜならば産業技術において、彼らは蒸気機関の救けもなく達せられうるかぎりの非常に高度な完成度を示してきているからである」(『シュリーマン日本中国旅行記』と、文明を支える技術を絶賛したのである。

幕末の江戸にほぼ同じ時期に渡来した、二人のヨーロッパ人が、そろって日本の「平和」「文明」「技術」を高く評価したのである。かつて私は、彼らが感嘆した日本社会の「平和」「文明化」「技術」の基礎には、「江戸の教育力」があると述べた(註2)。

以下、江戸時代の庶民の教育力やリテラシー環境の一端を知るために、江戸小咄を例に見ていくことにしたい。

寺子屋・手習いと父母のリテラシー

まず、寺子屋・手習いから帰宅した子供と父母の会話を見る。

小咄「無筆」(「蛙の落穂」、一七七七「安永」年)には、手習いから帰ってきた子供の書を、来客に自慢したくてたまらない父親が描かれる。

「わしが小僧めが、此頃大ぶん手があがりました」、「それは結構な事、どれ清書を見ませふ」、「アイ皆な草紙は、お師匠様へおいてきやした」、「そんなら、なんぞ書いて御目にかけろ」、「アイなんといふ字を書かふね」、「ハテなんでもいゝわさ」、「そんなら百の字を書かふ」と、大文字筆にて、すつと一十を引くと、親仁がそばから、「まづひゃの字出来たり」

1

※引用文末の番号は、出典「一覧」97頁の掲載順を示す

父親は、子供が百の字を書くのを待ち切れず、一画目で「ひゃ」の部分が出来たと褒める。「無筆」の題からすると、父親は十分なリテラシーを備えていない。しかし、子供を愛し学力の向上を喜んでいる姿が示されている。

同じ題の「無筆」(「笑談聞童子」一七七五「安永四」年)でも、手習いから帰宅した息子の清書を見て、「絵どり」(色具合)を絶賛する。

無筆なる者、子供を手習に遣りけるが、息子、清書をして親父に見せる。親父見て、「能く出来た、この絵どつたて大ぶん」

2

さらに、「手本」(「笑談聞童子」一七七五「安永四」年)では、娘こよが、手習いで仮名手本(仮名で記したテキスト)を終え、家で復習し読み上げる。

娘が仮名手本をあげて、内でさらへるを聞くに、御奥様御平産とよむ、おふくろが聞ひて「これおこよ、おらがいかに知らぬとて嘘を読むなよ、そふじゃあるまい」といへば、「ナニそれでも御奥様こへいさんと習ひやした」、「アレなだいやる、何おく様に五兵衛さんが並んであらう」

3

娘の読みを聞いた母親が、「私が読み書きに劣るからと言って嘘を読んではいけない」と言うのと、娘は、「私はきちんと御奥様こへいさんと習った」と答えた。すると母は、「どうして奥様と五兵衛さんが並んで出てくるのか」と言う。奥様が「ご平産」、安産だったという文字であるが、ここでは、女子が手習いに通っていること、母親がそれを聞いて疑問を言っていることがわかる。

「文字二つを何事にもつかふ」(「露休置土産」一七〇七「宝永四」年)では、寺子屋から帰った子供に、リテ

ラシーの劣る父親が話しかける。

親仁、子供、寺より帰りける時、手本を見て、「さあ、この手本読め」といへば、その子、口より読み終り、「何月いくか」と読みければ、親仁聞き、「先度は、この字を月と読み、またけふは、ぐわちと読むは、どふしたことじゃ」。子供「いかにも、この字をば、つきとも、ぐわちとも読みます。こゑとよみも同じことでござる。また、この机も、つくゑとも、しょくともいひまする」。親仁聞き、「さてもく知らなんだ。大分の学文をした」と悦びけり。

4

父親は、手習いから子供が帰るたびに手本で復習させ、自らも学びつつ、子供の成長を喜んでいる。これらの小咄からは、江戸庶民の父母が、たとえ自分はリテラシーに劣っても、子供たちに教育



子どもが字を学ぶ様子 『商売往来』(水戸市立博物館蔵)より



女性の先生が教える様子 『絵本栄家種(上)』(国立国会図書館蔵)より

の機会を与え、家庭で復習させ、自らも積極的にかかわっていたことがわかる。

女子教育・習い事・私塾

前出の「手本」(御奥様御平産)でも見られたが、女子教育も盛んであった。

「伊勢物語」(「笑談聞童子」一七五「安永四」年)では、駕籠かき七兵衛の娘が寺子屋で「百人一首」のテキストを終え、次に『伊勢物語』を欲しがる。

駕籠かきの七兵衛が娘、寺子屋へかよわせ、百人一首をあげてしまひ、「伊勢物語を買ふてください」とねだる。女房「何もふ読物はよしたがよい、高イ物は買われぬ」といふ。おやぢきいて「ナニ伊勢物語の事なら、買うてやれ」といふ。女房「らちもない、こなたも同じやふに云わしやる、このほうづきの子供が伊勢物語よんで何二するものだ、おいたがよい」。おやぢ「ハテそふ云わずと買ふてやったがよい、あいつが男の子なら、ぬけ参りもするだらう」

5

母親は、『伊勢物語』が娘には難しく値段も高いと反対するが、七兵衛は買つてあげると言う。母親は、困った父親だと言い、まだ髪の毛も生え揃わない酸漿頭の子供に恋愛物語はわからないと言う。七兵衛は、「そう言うな、あいつが男の子だったら伊勢に抜け参り(奉公先から伊勢参り)をする年頃だ」と言うのである。ここでは、両親が次のテキスト選びに参加し、母親は、『伊勢物語』の内容を知っており、父親は知らない。この会話が庶民の家で行われていることは注目される。

経済的に余裕のある家では、子供たちに手習いだけでなく、他の習い事にも行かせた。

京都の小咄「したり顔」(「笑の友」一八〇「享和元」年)では、祖父と孫との会話が展開される。祖父は溺愛する孫に謡曲を習わせ、帰宅後復習させた。そして、孫が謡うのを聞いた祖父が悪い部分を指摘すると、孫は自分は習った通り謡っていると反論する。すると、

「ヤイ、おのれ、ませおるがな、おりや、なんでも知って居るはひやひ」、「そんなら、いま、わしが諷ふ謡をきいて見なさい」、「ヲヲうたへうたへ」、「いでそのときの鉢の木は梅桜松にてありしよな、サアなんじゃエ」、「ソレカ。それは菅原」

6

祖父は孫に「ませたことを言うな、わしは何でも知っている」と言うと、孫はならばと、北条時頼が佐野源左衛門に与えた領地、加賀梅田庄、越中桜井庄、上野松井田庄に因む「鉢の木」を謡い名前を尋ねる。祖父は、梅王、松王、桜王が登場する浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』と間違えるという話である。これは、知識・教養を基礎とするハイレベルな内容である。

「不審紙」(「喜美談語」一七九六「寛政八」年)では、私塾に通っている亭主が、本を読みながら別に紙を裂き自製の付箋を貼っている姿を見た妻が、なぜ紙を貼っているのかと問う。

ある所の御亭主御学文を好み、本を読んで居ながら紙をひつ切てつばをつけ、本の中へはるを内儀見てゐて、「モシ旦那へ、なぜ其よふに紙をつばでお張なさる」。亭主「イヤこれはどふも分らぬ事を、先生に聞時のために印に張ておくのじゃ、是を不審紙といふ物じゃ」

7

亭主は「先生に質問したい部分に、印として貼っている」と答えている。亭主が主体的に予習をする学習姿勢が示されている。



女子の教科書『女大学』(水戸市立博物館蔵)より



立原翠軒の字を鑑賞し練習するための書
(水戸市立博物館蔵)

古典リテラシー

小咄には、古典をもとにした高次な内容も見られる。

「平家物語」(「喜美談語」一七九六「寛政八」年)では、一人が『平家物語』の講釈を習ったが、水鳥の羽音で驚いて逃げる(富士川の合戦)など迫力に欠き、面白い合戦シーンがなかったと不平を漏らす。

「コレ此頃おらがほうで、平家物語を講釈するが、水鳥の羽音で逃たのなんのかのと、面白い軍がなひ」。「ヲ、そふだろう、おれも旦那の所で、源氏物語の講釈を聞たがちつとも軍はなひ」

8

相方は、「そうだろう、自分も旦那の所で『源氏物語』の講釈を聞いたが少しも合戦がなかった」と相槌を打つ。江戸庶民が『平家物語』と『源氏物語』の内容を知っていたことを前提とする小咄である。また、「**学者**」(『笑談聞童子』一七七五「安永四」年)では、儒学者の家に盗みに入った泥棒が、論語を引用する。

儒者の家へ盗人來りて、窓より手をいれてさがす、先生其手をとらへて歎曰く、「此人にして此やまひあること」。盗人は、なむさんしまい付けたと思ふ所に、錢百文握らせて、手を放す、盗人手を開き見て、「あ、すくない哉仁」^{かなじん}

9

儒学者の家に盗人が来て、窓から手をいれ物色していると、儒者がその手をつかまえた。儒者は盗人の病を嘆き、慈悲を施した。盗人は観念したが、儒者は一〇〇文を握らせ手を放した。喜んだ盗人であったが、手を開いて「少ない」と歎いた。盗人は孔子の論語「巧言令色鮮仁」^{すくなくし}をもじって言ったのである。

日常のリテラシー

日常生活において、庶民を取り巻く環境の一つである看板も、リテラシーを高める要因となった。小咄「**訴状の書きそこなひ**」(『軽口御前男』一七〇三「元禄一六」年)では、行政文書をめぐって役人と庄屋が会話する。

万年亀太郎様と申す御代官あり、お下の百姓山公事を取りむすび、訴状をさしあぐるとて、万年を書きそこなひ、一年亀太郎と書きける、御取次衆見たまひ、「名字がちがふた、これは

一年じゃ」と叱られ、庄屋、せかぬふりで、「力落しました」

10

架空の代官、万年亀太郎が支配する村の農民が、山論訴訟の訴状を提出したものの、取次役人が、訴状の宛名の万年が一年になっていると叱ると、庄屋は落ち着いて「力を落としました」と言った。訴状のなかの誤字の可笑し味を読者も共有できたのである。

市中の看板もまた、リテラシー向上に寄与した。

「**三角**」(『二のもり』一七七五「安永四」年)には、「三角尽くし」の看板を掲げた家の話が登場する。玄関も座敷も床の間の違い棚も、ことごとく三角の趣向の家で、客が主を困らせようと三角の水を求める。

亭主、うろこがたの着物、三角なやき飯を食って居る。何でも難題をいふてこまらさふと、「モシ三角な水が所望」といへば、「これ、さんよ、すみ切った水をあげろ」。角切ったは三角。

11

三角が連なった鱗紋の着物を着て、三角の焼き握りを食べていた主人は、妻(名前がさん)に、澄みきった(角切った)水をあげるよう命じ、角を切ると三角になるという話である。

町の張り紙も文字に接する機会であった。

「**大屋**」(『こころの春さめ咄』一七七九「安永八」年)は、「貸し店」^{たな}の張り紙を、たびたび子供にはがされる家の話である。

貸店の札を、子供がいたづらにへがす。たびくにおよべば、大屋どの、あんじをつけて、厚板に「かし店」と書きつけて、五寸釘にて、じゃうぶに打ちつけ、「これでは、四、五年もこらへる」

12

困った大家は、厚板に書いて五寸釘で打ちつけ「四、五年もつ」と安堵する。

また、文字をテーマにした会話もある。

小咄「文字」〔聞上手二篇〕二七七三〔安永二二〕年では、「金」という字の草書と楷書の違いを話題にしている。

「金といふ字は、よくこしらへたもんだ。人の主と書きま^{ぬし}す。なるほど金は人の主にちがいはない」といへば、側の人が「それでも真では人のぬしとはかかぬぞや」、「はてさて、死んでは（真では）いらぬものじゃ」

13

すなわち、草書では「人の主」と書くが、「真」（楷書）ではそうは書かないと言うと、死んでは金はいらないと応ずる。字の形、くずしなどの知識が前提となった話である。

同じく、「柱といふ字」〔吟咄川〕二七七三〔安永二二〕年では、「柱」の字を空中に書きながらの会話である。

「コレ、柱といふ字は、どう書く」、「ウン、アノ柱といふ字は、木へんをして、主といふよ」と、宙へ書いて見せる。「コレてめへ、畳の上へでも書いてなら、そうあとで消してしまふがよいに、宙へ書いて、またあとで消すことがあるものか。ばか／＼しい」、「インニヤ、消しておくがよい」、「ナゼ」、「人がつきあたる」

14

柱という字を空中に書いて教えたあと消す動作をしたのであろう。実際に畳の上に書いたならば消すだろうが、空中ならばその必要はないだろうという相手に、人が当たるといけないと答える。日常的に字を尋ね教える習慣があったことがわかる。

「江戸鑑」〔吟咄川〕二七七三〔安永二二〕年は、自身番（市中の自警制度）の下役人が本屋に『江戸鑑』（市制一覽）を借りに行く話である。

「コレハ右衛門、こんたはちよと、向ふの本屋へ行つて『江戸鑑を、ちよと、お貸しなすつてくださへ』と言って、借りてきてくださへ」、「アイ」と向ふの本屋へ行つて、「申しへ、自身番から参りやしたが、どうぞ江戸鑑を貸しておくんなさんやし」、「ハア、江戸鑑はなかったわへ。また自身番で江戸鑑をなんにするやら」、「大方、ひげでも抜くのでござんしゃう」

15

本屋で『江戸鑑』の用途を聞かれて、「鏡」だから髭抜きに使うのでは、と答えている。本屋・貸本屋なども文字文化を支えていたのである。

町人のリテラシー

江戸のさまざまな町人たちのリテラシーも見ておきたい。

「書判」〔噺稚獅子〕二七七四〔安永二三〕年は、古道具屋の話である。

無筆の古道具屋、女房に帳面をつけさせます。あるとき、唐絵の皿を買ひました。「この箱の蓋へ大文字に書き付けしやれ」といふ。女房、書きました。大文字に書いたゆへ、皿といふ字があまり、脇へ皿といふ字を書き、亭主に見せければ、「ヲヲよく出来たが、書き判はいらぬものだ」

16

古道具屋の主人は字が書けないために、いつも女房に帳面を付けさせていた。あるとき中国製の皿を買い、箱の蓋に大きい字で皿の銘を書くように指示した。ところが、女房は大きく書きすぎ、最後

の皿の字を脇に書いた。これを見た主人は花押と間違え不要と言ったという話である。古道具屋の主人らしい間違いであるが、日頃女房が帳簿を付けていたこと、箱書きしていたことは注目される。

「おつけ」（「笑談聞童子」一七七五「安永四」年）は、鳶職人（あるいは火消か）が、飯屋の台所に張ってある献立書を見て、なんという字かと尋ねる。

鳶の者、御だい所へあがり、張りである献立をよんで見る。「もしへ、此字は何といふ字だへ」、「ヲ、それはしるといふ字さ」、「ハ、アどふりて、おつけのけの字がある」

17

尋ねられた相方が「汁」と答えると、鳶職人は、なるほど「おつけ（味噌汁）」の「け」の字があると納得するのである。庶民の食事処にメニユーが張っており、字の読めない者も仮名の「け」は知っていたことがわかる。また、自然体で尋ね教えられる環境も知られる。



水戸の本屋「須原屋安次郎」が出版していた教科書（水戸市立博物館蔵）



五波亭国貞『浮世名異女図会』より「江戸町芸者」（江戸後期、国立国会図書館蔵）

遊女・芸者のリテラシー

社会の周辺に生きていた遊女・芸者たちの話もある。

「傾城の学問」（「萬の宝」一七八〇「安永九」年）は、そのなかでも、比較的身分の高い遊女の話である。学問熱心な傾城（高級遊女）が本を読んでいると、禿（遊女見習いの幼女）が何のために学問をするのか尋ねる。

傾城に学問を好みたるある。つねに唐机などかまへ、孔雀の尾を卓下に立て、南京の肉入など、ぎやうさんに飾りたて、いろ／＼の書物を読みけるところに、あるとき、かの女郎の禿申しけるは、「なんのために学問とやらをなんす」と聞く。女郎「学問は天地のことを知り、くもりたる月は晴れ、ふさぎたる胸も開く」と物語る。かの禿、しばらくして、廊下よりいそぎ来り、「おいらんのさっきの学問をくんなんし」といふ。「ばからしい。学問をなににする」、「客衆が癪が越りんした」

18

遊女は「世の中のことわかり、胸の詰まることがなくなるから」と答える。すると、のちに禿がやってきて学問が欲しいという。理由は、客が癪になったからという。ここでは、遊女が自らの部屋を書齋とし、多くの本を読む意味も記されている。

「紙」（「御伽草」一七七三「安永二」年）は、夜、二人の芸者が仕事を終えての帰り道、一人が便意をもよおしたが紙がなかったことから始まる。

芸者、ざしきを仕廻て歸りに、「私はいつそ大便（後架）に行きたい。ハア、紙がない。そのけいこ本の口（最初）一枚、ここは白紙じゃから、これで、これで」と、ふき歸り、明日、また、二人づれでそこを通り、「ゆふべ、おまへがおこまりなさったところは、ここらであった」といふ。みれば、かの紙に、このまぎん。

19

ちように稽古本を持っていてその最初の頁が白紙であるのでこれですませた。ところが、翌日その道を通ると相方の芸者が、あなたが夕べ困ったのはここでしたねと言った。見ると、昨夜の紙に、この持ち主はぎんと、自分の名前が書いてあったという話である。芸者が稽古本を使っており、紛れないように、実は最初の頁に自分の名前を書いていたことがわかる。

手帳と手紙

「手帳」〔「今歳花時」一七七三「安永二」年〕は、行倒れ人が手帳を持っており、いろいろな場所で行倒れた時の扱いが記録されていた話である。

宿なしの行倒れ、色々にして見ても立って行かぬ。大屋衆立合ひ、かれこれいふ内、ふところを見れば、行倒れ覚帳といふ書付、引き出して見たれば、「何丁そば五ツ。何丁飯三ぜん、何丁灸ばかり」

20

都市下層民と思われる行倒れ人が、自ら手帳に記していたのである。

「手紙」〔「高笑ひ」一七七四「安永五」年〕には、書状に関するリテラシーが描かれる。天から落ちて腰を痛

めた雷様が、心配した住民に「天に戻れないので、住民に手紙を書いて迎えを呼んでほしい」と頼む。

雷落ちて腰が抜ける。近所の寄り合ひ「どふなされた」と問へば、「怪我をして、この分にては、天上登られず、何とぞ迎ひを呼びに手紙を遣りたい。書いてくだされ」といふ故、「何と書きます」、「一筆啓上申し候」、「そのつぎはな」、「ひからば」

21

住民に、なんと書くかと問われた雷様は「一筆啓上申し候」の定型の書き出しに続けて、本来は「然らば」と続くところを、雷なので「ひからば」と言ったという落ちである。庶民が書状の定型句を知っていることが前提の話である。

算術のリテラシー

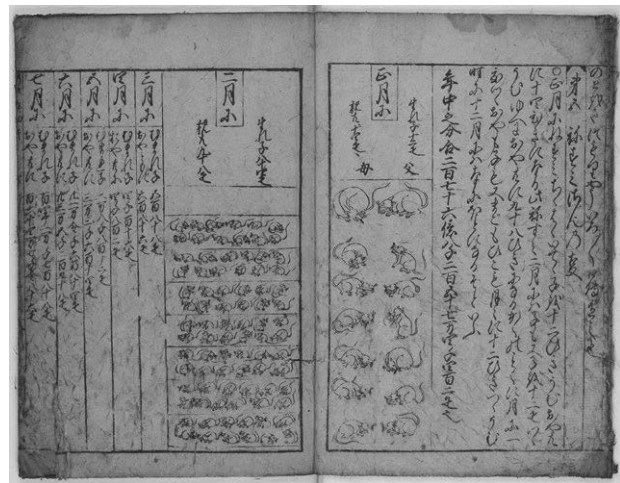
最後に、数学に関するリテラシーについて見たい。一六二七（寛永四）年に刊行され、江戸時代を通じて広く普及した算術入門書の吉田光由『塵劫記』には、「二割引き、うちは八にてかくるさん」、「二割まし、そとは十二をかけてよし」と、二割引き、二割増しの計算方法を示している。この前提として、乗除の原理を知っていなければならない。

同じく「ねずみ算」の項目には、次のような超難問が記されている。

正月にねずみいで、子を十二ひきうむ、おや共に十四ひきに成也、此ねずみ二月には子も又子を十二ひきづ、うむゆへに、おやともに九十八ひきに成、かくのごとく月に一度づ、おやも子も孫もひこも月々に十二ひきづ、うむ時、十二月の間になにほどになるぞといふ。

22

これを、数式で示すと、一月は、ねずみ一組が一二匹生むので子と親で一四匹、二月は一四匹が七組のペアとなり八四匹を生むので、これに親一四匹を加え合計九八匹。以下、これを繰り返し、一月には「二百七十六億八千二百五十七万四千四百三十二足に成也」と答えが示される。当時は電卓やパソコンはなく、算盤と算木（計算用具）のみで解いた。使う数字はもちろんアラビア数字ではなく、漢数字である。



吉田光由著『塵劫記』の類書『新編塵劫記』(1669年刊、中井家蔵)より「ねずみさんの事」 画像提供：立命館大学ARC (nakai0015)

笑いを共有する社会

以上、江戸時代に刊行され、広く社会に普及した小咄を例に、その内容から当時の庶民が、年齢や性別、さらには階層・職業の違いを超えて、読み書きのリテラシーを身につけていたこと、またその社会的環境があったことを明らかにした。これらの小咄が、笑いを伴うことも注目したい。冒頭紹介した来日外国人が驚き称賛した近世日本の長期の「平和」と「文明化」は、こうした「笑い」を共有する社会による文化・教育の発展を基礎に達成されたのである。

註

1 『抱庵遺稿1』日本史籍協会編、東京大学出版会、一九七五年

2 大石学『江戸の教育力』東京学芸大学出版会、二〇〇七年、同『新しい江戸時代が見えてくる』吉川弘文館、二〇一四年

小咄出典一覧

1 『江戸小咄集1』一三五頁	7 『江戸小咄集2』一〇〇頁	13 『江戸小咄』一七六頁
2 『江戸小咄(続)』八七頁	8 『江戸小咄集2』一一八頁	14 『日本小咄集成』中巻、二五六頁
3 『江戸小咄集2』三〇頁	9 『江戸小咄集2』二八頁	15 『日本小咄集成』中巻、二五八頁
4 『日本小咄集成』上巻、二九六頁	10 『日本小咄集成』上巻、二六三頁	16 『江戸小咄(続)』九六頁
5 『江戸小咄集2』三五頁	11 『江戸小咄』三五頁	17 『江戸小咄集2』三七頁
6 『江戸小咄(続)』二七六頁	12 『日本小咄集成』下巻、一〇六頁	18 『日本小咄集成』下巻、一一七頁
		19 『江戸小咄』二二六頁
		20 『江戸小咄』二四九頁
		21 『江戸小咄(続)』一三九頁
		22 『新編塵劫記』

『日本小咄集成』上巻、中巻、下巻、浜田義一郎・武藤碩夫編、筑摩書房、一九七一年
『江戸小咄集1』『江戸小咄集2』宮尾しげを編注、東洋文庫、一九七一年
『江戸小咄』(一九七三年)、『江戸小咄(続)』(一九七六年)興津要編、講談社
『新編塵劫記』吉田光由著、寛文九(一六六九)年刊、中井家蔵